

## 第5部

### 行動計量学との 関わり

巻頭言が私事にわたるのは不適當かも知れませんが、私は大学の数学科を卒業し、しばらくして統計学を専門とするようになりました。学会で言いますと、日本数学会が本籍、日本統計学会が現住所というわけです。この比喻を続けるとき、日本行動計量学会は私にとって何であるかという問が出て来ます。ある晩眠れぬままに、この問を考えつめて、得た答は「隣家」でした。

本学会を隣家としか考えない人間が、会報のこの貴重な紙面をふさぐのはけしからんという声を予想して、急いで釈明します。この「隣」は「隣りは何をする人ぞ」というような心もとない関係ではなく、困った時には米や塩を借りに行けるような親しい間柄です。また、両家の間には境界領域と言いますか広い敷地があって、食用に適する野草もあります。

日本統計学会は、まもなく創立50周年を迎えます。でも由緒があるということは、万事それだけ老化しているということにもなります。私がこの家に移った30年前は、家の中に新鮮な食物が充満していた記憶がありますが、今はかなり乏しくなりました。狭い家の中の物を皆が分け合って暮している状態です。家族の中には、空気中の窒素から蛋白質を作り出して食料としている人もいます。私にはそのような技能がありませんので、もっぱら自然食品に頼らなければなりません。それで時々隣りへ借りに行き、また野草をつむことになります。

近頃、私は両家の間の土地が非常に肥沃であって、いくらでも開墾の余地があると思うようになりました。これを統計的データ解析という言葉で表現することにします。日本統計学会の中では統計的方法論がかなりの部分を占めていますし、日本行動計量学会の中ではデータ解析のウエイトが大きいと言ってよいでしょう。この両者の関係は、ある場合には競争的になるかも知れませんが、主として相補的であり、この関係が現在よりもっともっと緊密になることによって、両家はそれぞれ大きく発展すると私は信じます。

さて、両家の家風には大きな違いがあります。私の家は何事も格式ばっていますが、隣家は新築間もないせいか自由闊達の雰囲気があって、善悪の問題ではありませんが、それぞれの会報の上に違いがはっきり出ています。この文を書きながら、私は自分がお隣りの座敷へ上りこんで、いつになく冗舌を弄しているのに気付いて苦笑しています。

とにかく、このせち辛い世の中に、こうした隣り付きが出来るということは、誠にありがたいことです。ただこれが多分に私の個人的付き合っていて、両家の全面的な関係でないのは残念です。私がこの付き合いから得ているものは、恐らく私の家のだれにとってもプラスであると信じますし、逆もまた真であると思うからです。お隣りの一層のご繁栄と、両家の付き合いの発展とを祈りつつ。

[会報18号 (1979) 巻頭言、当時：理事・大阪大学基礎工学部、2006年逝去]

## 文化の行動計量

三 隅 二不二

これほど国際関係が身近になってくると、好むと好まざるとに拘らず、文化の計量を考えざるをえなくなる。30年来、実験社会心理学としてのグループ・ダイナミクスを研究してきたが、卒直に述べて、あまり文化の相違について真剣に考えてこなかったことを反省する。

実験結果に、米国などの研究と相違が見出されたならば、それを文化差と考えるよりも、実験状況を構成する条件差として考えてきた。条件差のなかには文化的要因も含まれているかも知れないが、それは部分的影響であると考えてきた。一方、文化人類学や文化心理学では、いうまでもなく文化の特殊相を記述し、解釈してきた。中根、土居の日本社会論や日本人論は、その特殊相のみを強調している。

両者の視座は一度再吟味しておかねばなるまい。それは、ともに方法論の問題である。

概念と方法の適用に関する再吟味の問題である。概念化の問題としては、従来の社会科学の分類それ自体に問題がある。政治・行政・宗教・教育・体育などの分類それ自体が社会的現象の特殊相に相即したものであって、物理学・生理学のような社会科学の分野における一般学のカテゴリーが存在しないようである。私どもは、リーダーシップ現象の行動計量を進めているうちに学際現象の“広場”としての一般学としてのリーダーシップ論がおちつく先がないことを知った。政治のリーダーシップは、行政的リーダーシップとも、経営リーダーシップとも、教育のリーダーシップとも異なる。お互いに異なることだけを論議して、それらを相互にすり合せて、類同性を体系化する分野が存在しないのである。データの分析においても、一般性、普遍性と特殊性の双方を同一のデータから解析する視点に欠けている場合が少なくない。日本人論の行詰まりのひとつもそこにあるだろう。中根、土居の論文を読んで感じることは、どこまでが普遍的なもので、どこから日本的なのか、はっきりしないのである。日本型集団主義の論議においても同様である。アメリカ人は個人主義、日本人は集団主義という観点から、スケールを準備して永年データを収集して分析してみたが、結果ははっきりしない。英国・米国と日本における同様な工場・生産工程の職場の管理・監督者を対象としてリーダーシップ行動評定を行っているが、予想以上に対人関係に対する配慮因子に関して類似性が存在することに驚いている。もっと異なるはずだという Assumption があったためかも知れない。

比較対象となる資格をもったものは“同じようで異なるもの”であるという林知己夫のことばは示唆的である。全く同じもの、全く異なるものは比較対象となる資格がない。文化の比較の場合、サルと人間の類似性すら追求する人間科学の世界では、同じようなものが多く、文化差といっても、それは少しばかり違うのではないか。それにも拘らず、最初からちがったものであるという“おもいこみ”が強すぎるのではないか。文化の行動計量学は、まだこれからである。

[会報39号(1986)巻頭言、当時：理事・大阪大学人間科学部、2002年逝去]

最近のパソコンの普及は目覚ましいものである。ちょっと一晩豪遊するのを儉約するくらいで、パソコンが購入できる。趣味として個人で買って楽しんでいる人も少ない。

これに伴って、ソフトウェアも完備してきた。昔は、むずかしい理論と、プログラムの技法を同時に学ばなければならなかったのが、既製のソフトウェアが簡単に入手できるようになった。

データを入力するだけで、いろいろの分析をし、その結果を美しいグラフとして出力してくれる。昔は平均値や分散を求めるのさえ、たいへんな手間がかかったのが、近頃ではどんな分析手法でも、ほとんど手間をかけないでできる。

またデータの入力もなるべく自動的に行いたいというので、新しい入力装置がつぎつぎに開発されてきている。人間はなにもしなくても結果が出てしまう。

確かに便利な時代になったものである。ところが、どうも少し変な傾向が現われてきたのではないかと思われる。

どんな分析手法も、その裏にはっきりとした考え方がある。ある仮説の上に立っており、その仮説が成り立つ条件の範囲でしか有効でない。ところが、すべてが自動化されてしまうと、出発となる立場も、途中の計算過程もすべて無視されて、結論だけがもっともらしく示される。これでは、何をやっているのかわからない。

入力のデータも、また出力された結果を利用するのも人間であり多くの分析手法は、人間の直観をより定量的に表現しようとしているのであるが、この点を忘れて、結論だけを手軽に入手しようとする。そこには人間の洞察力の余地はまったくない。これでは分析結果の有効な利用は望むことはできない。入力を観察してみる。出力もできるだけ直接に観察してみる。そこでデータの意味を考察して、最も合理的な結論を出すように分析する。あるいは、結論さえ出さず、ある処理をした結果をできるだけ観察しやすい形式に表現して、そのまま観察者に提供する。

それを観察し、判断する人は、同じデータから異なった結論を出すかもしれない。これが人間の社会の常識である。同じデータからある人は慎重にしろという消極的な結論を出し、また別な人は、積極策を提案するかもしれない。この人間の判断を柔軟にできるようにするのがデータの処理の目的であり、結論そのものを出すのが目的ではない。

あまりに便利になったために、生のデータを直接に観察して洞察する習慣を失ってしまうのではコンピューターの普及も、分析手法が広く知られることも、あまりうれしいことではない。

[会報28号(1982)巻頭言、当時：理事・慶応義塾大学理工学部、1983年逝去]

## 非対称性の解析と行動計量学とのかかわり

千野直仁  
愛知学院大学心身科学部

私の世代の多くは、学部を卒業した頃行動計量学会が発足し、学会で故林知己夫氏、柳井晴夫氏や岩坪秀一氏らの大先輩達の後姿を見ながら、育った。私自身は、故内田良男氏や故水野欽司氏に多変量解析を教わり名大大学院教育学研究科心理学専攻修士課程を1972年に終了し、その年に現在の愛知学院大学に助手として赴任した。翌年、統計数理研究所で開催された第1回行動計量学会大会では、定性的要因の場合の正準相関分析のアルゴリズムを提案していたことを、今回の原稿を作成するにあたり、色褪せた第1回大会発表論文集をひも解いてなつかしく思い出した。私自身のその後の研究のひとつの方向を決定づけたのは、第5回大会で発表した「N個の対象間の非対称な関係を図式化するための一技法」であり、その前の数年間クラス集団の縦断的ソシオマトリックスを収集する中で考えたものであった。また、翌年にはこれを加筆修正して Behaviormetrika に投稿し運良く掲載されたことが、私が非対称性の解析にのめり込む契機となった。もっとも、この方法は、70年代後半の時点では未だ Torgerson 以来計量心理学の分野で発展しつつあった対称データに対する多次元尺度法、すなわち伝統的な（対称）MDS に比べると世界的にも提案者はほとんどなく、さびしい船出となった。しかし、80年代になると、日本でも岡太彬訓氏・今泉忠氏をはじめとする研究者による非対称 MDS に関するユニークなモデルが幾つか提案され、今や日本が世界の非対称 MDS の研究をリードしているといっても過言ではない。

いずれにせよ、私の最初の論文では、方法的には制約の大きいモデルを扱っていたので、その拡張は決して難しくはなかったが、もともこの論文のもとになったデータが縦断的ソシオマトリックスであったので、私自身の関心は、モデルの拡張よりは非対称 MDS とは発想が大きく異なる非対称な関係の変化のダイナミックスを記述したり予測したりできるモデルや理論の構築にシフトしていった。こうなると、非対称 MDS で得られる対象の布置は、ダイナミックモデルの状態空間に過ぎず、その空間内で生起する成員相互のダイナミックスに関する理論や方法こそが、重要に思われた。これが、私のその後の研究のふたつ目の方向を決定づけた。

結局、この方向の研究には数学の分野の力学系の定性理論の学習が不可欠と思い、当時名大で教鞭をとっておられた力学系の専門家であられる白岩謙一氏の門を叩いた。先生にはその後もずっとお世話になっている。また、この方向の研究に興味を持って下さった高根芳雄氏、吉野諒三氏、中川正宣氏には、これまでいろいろ貴重なコメントをいただいていた。近年、自然科学の分野のみならず社会行動科学の分野ではよく話題となっているカオス理論は、力学系の定性理論にその基礎を置くが、多様な社会行動科学の分野の現象に対して力学系の定性理論を応用する研究は、まだまだ少ない。

最近、高根氏が81年に提案した対称 MDS のひとつの手法である MAXSCAL を非対称データの場合に応用する最尤非対称 MDS を、若手の佐部利真吾氏と開発しつつあるが、その中で非対称性を図る物差しとして評定尺度を用いると、数理統計学の分野で長い歴史のある正方分割表の研究と非対称 MDS の研究の間に大きな橋渡しができることに気付く、この方向の非対称性にかかわる研究を進めつつある。

[理事]

一瞬、鋭い眼光が放たれた、と思った。

1988年の夏、千葉大学で開催された行動計量学会の研究発表大会のセッションの合間に、当時既にカナダ・McGill 大学教授であった高根芳雄先生から、林知己夫先生（当時・統計数理研究所所長、行動計量学会初代会長）に紹介された時であった。California 大学 Irvine 校で学位をとったものの、数理心理学という狭い分野だけに、就職に苦慮して駆けずり回っていた時期であり、夏休みに帰国した高根先生が後輩の私をいろいろな方々に紹介してくださっていた。

はじめ高根氏を相手に、にこやかに対応していた林先生が私の方へ向いた時であった。こちらで大先生の前で緊張し真剣にお話をうかがっていたが、一瞬、鋭い眼光を放ち、先生も真剣な眼差しでこちらをみつめ、「いま、(社会調査) データ・ライブラリーを創ろうとしているんだ。手伝ってもらいたい」と、おっしゃった。その場では経緯が分からず、ただ大先生の前でうなずくだけであった。その年度末に林先生は研究所を退官なさり、私自身は公募審査を経て助手として入所することになった。

あとで考えてみると、Irvine での恩師、印東太郎先生が林先生にお手紙を差し上げていたのであろうと推察される。印東先生も行動計量の重鎮として林先生が頼りになさっていたが、60歳を前に米国に渡り、直接には学会の活動から離れたものが高根氏、西里静彦氏、鮫島史子氏とともに海外で「行動計量学」をひろめ、功績賞を受賞されている。印東先生は名誉会員でもあり、林先生と同様、生涯現役の人生を送られた。学部卒業後、留学を模索していた私に印東先生を御紹介くださったのは、学会草創期のメンバーの一人、丸山久美子先生であった。

学生時代、「統計学」で教官への研究協力や後輩の大学院生の指導で給与を得ていたものの、自分ではあまり理解できた気がせず、嫌いなものであった。しばらく様子を見て、本来の「数理心理学」に近い研究職に移ろうと思っていたが、入所直後、退官されたが「生涯現役」の林先生の国際比較調査とデータ・ライブラリー創設活動をお手伝いすることになった。各国の大先生との間で通訳など、お手伝いするなかで、統計学の大先生も統計学が「分からず」、それ故にその後の「数量化理論」の開発に繋がったのだと知った。数学を用い、一見、科学を装っているが、実はその実践的論理があやしい数理統計学への反動として、「統計数理」、「数量化理論」、そしてその延長上に「行動計量学」、「多次元データ解析」、「調査の科学」、そして今日の「データの科学」が発展してきたのであった。現実社会の重要な課題を、データの収集計画、収集、解析、政策立案への基礎情報提供など、全体的視点から、実証的な統計学の活用を意図する学問が成立、発展してきたのであった。

[理事、事務局長、1992年度（第7回）優秀賞受賞]

## 独学にも行動計量学会とい師匠あり

足立浩平

大阪大学大学院人間科学研究科

「文科系と理科系」という区別は、「系間分散」より「系内分散」の方が大きいように思えてよくありませんが、あえて使うと、私は、文学部というどっぷり文科系の学部を卒業して、今は、「行列をひっくり返したり、パカッと分けたり」する理科系的と思えることに美学をおぼえています。振り返ると、大学入学時から4段階で大きく変わったものです。第1段階は入学時で、「文学部なので、もう数学はやらなくてよい」と喜んでいました。次に第2段階は、「文学部でも心理学を専攻したため統計法が必修で、ちょっとは厄介だな」と感じた段階です。そして、心理学を勉強するうちに、なぜか、「心の中の過程を数理的に表現する分野」に興味をおぼえたのが第3段階です。そして、最後の第4段階は「心理学そのものではなく、そのデータを分析するための統計手法」に興味に至りました。以上の4段階で「興味が大きく変わった」というべきか「自分の興味を発見するのに長い時間がかかった」というべきか判然としませんが、あまり数学が得意でなかった人間が、いつの間にかサイコメトリックスなる数学をベースにした学問に惹かれたのは不思議です。この経過は、「ストレートに美味しい食べ物」から、たとえば鮎寿司のように、最初は臭くてとても好きになれない「酒のつまみ」に、嗜好が移っていくことにも似ているように思われます。

このような次第で今は、サイコメトリックスで発展する多変量データ解析法を研究していますが、上記の第3と第4段階では、独学で勉強したつもりです。しかし、「独学の影にも師匠あり」で、この師匠が行動計量学会でした。学会の諸先輩が書かれた論文や書籍を通して、間接的に指導をうけたと言えましょう。行動計量学会に入会したのは1986年で、初めての大会での発表は1988年。心もとない発表で冷や汗をかきましたが、若い方には「心もとない発表での冷や汗」をどんどんかいてほしいと思います。この前後に大きな進歩をとげることができると思うからです。そして、1992年以来欠かさず大会で発表しています。こうした口頭発表に際してのコメントや質疑応答、および、投稿した論文の査読結果を通して、さらに勉強させていただきました。今後も生涯現役プレイヤーを目指して、発表、および、最近とだえがちな論文投稿をできるだけ続けたいと思います。

最後に、日本行動計量学会の良い点を述べたいと思います。幾つかありますが、フレンドリーな雰囲気当学会の一番の長所と思います。理論から幅広い応用までテーマのスペクトルが広い学会でありながら、大会では、分野や年齢の違う参加者どうしが気さくに話し合い、和気あいあいとしている雰囲気は、他の諸学会と比べて、大きな長所と思えます。もう一点挙げると、ちょっと視点が変わりますが、欧文誌の「Behaviormetrika」はとてもよい名称と思え、この名を考え出された先輩方に感謝しています。というのも、造語ベースのために、「Journal of the Japanese Society ...」と限定が着かず、最初から国際化を目指せる名称になっているからです(ときに「Biometrika に論文を載せたのですか」と間違われて嬉しくなることもあります)。以上、原稿締め切り間近に、思いつくままに書き綴り、まとまらない内容になりましたが、35周年と十分な年月を経た行動計量学会のさらなる発展に向けて、これからもお世話になりながら、その分、恩返しにも努力していきたいと思えます。

[理事、1997年度(第12回)優秀賞受賞]

私の論文が行動計量学会の学会誌に最初に掲載されたのは1982年であった。爾来四半世紀、2008年の現在に至るまで「行動計量学」に8編とBehaviormetrikaに3編の計11編の論文が掲載されている。この数は、私が所属する日本の統計関連諸学会のうちで最多であり（第2位は応用統計学会の8編）、その意味では日本行動計量学会が私の主たる研究活動の場といえるであろう。

8編の「行動計量学」の論文のうち、『コンピュータ指向型データ解析の新手法』（1992）、『非線形手法と行動計量学 - 統計学の視点から -』（1997）、『データマイニングと知識発見 - 統計学の視点から -』（1998）、『「処置前 - 処置後」データの解析と平均への回帰』（2002）の4編は「展望」などの総合報告的なものである。その時々で自分が興味ある研究課題について勉強し、その成果を発表する場を与えていただいたという意味で、学会には非常に感謝している。これを見ると、その当時興味を抱いていた対象が懐かしく感じられる。もっとも、これらのテーマは今現在でも私にとって重要な研究対象であり続けてもいる。

上術の11編の論文のうち、『ランキングの信頼度評価 - 2002 FIFA ワールドカップの結果分析 -』（2002）は私の論文の中では異色である。表題から察せられるとおり、日韓同時開催となった2002年のサッカーワールドカップに題材を取った論文である。御他聞に洩れず、この年私にもわかサッカーファンとなり、熱心に試合をテレビ観戦すると共に、各試合での得点の一覧表を作り、サッカーの得点がポアソン分布で近似されることなどを確認していた（稀な事象ですからね）。この論文の内容は、FIFA ランキングと実際の試合結果との関係进行分析したものである。この年は、FIFA ランキング2位のブラジルが優勝したのであるが、ランキング1位のフランスが予選で敗退し、22位のトルコ、42位のセネガルの活躍が著しい回であった。論文の中では番狂わせ度なるものも定義し、それによると番狂わせ度1位はセネガル、2位はフランスであった。ブラジルの番狂わせ度は32位と出場チーム中最下位でランキングどおりの勝ちを収め優勝したのであった。番狂わせ度が下から2番目のチームはトルコであり、やや意外な結果と思えたが、よく調べてみるとランキング下位のチームには勝ち、上位のチームには負けていることがあとで判明した。数量化によりものごとの実際がよく見えたという好例であるという意味で、まさに行動計量学的な結果であるといえよう。

ところでこのワールドカップ論文は、多分レフェリーの方々には誰が書いた論文かが分からなかったのではないかと推察する。多くの場合、たとえ著者名が消されてあったとしても、論文内容や参考文献などから投稿論文の著者は見当がつくものである（狭い世界ですから）。ところがこの論文の場合、私のそれまでの研究とは全く異なる内容であり、しかも学会発表も一切していなかったため、著者名の推測は多分出来なかったのではないかと。もう1度くらい、誰が書いたのか分からない論文を書いてみたい気がする。

[理事、1994年度（第9回）優秀賞受賞]

## 若い研究者がイキイキ活動できる学会

富山 慶典  
群馬大学社会情報学部

行動計量学会は、わたしが初めて入会した学会です。大学院修士課程へ進学した時期とほぼ同じだったと思います。一人前の研究者になりたいという夢を持っていたわたしにとって、イキイキと活動されている多くの研究者に出会えたことは、幸運であり幸福でした。そのような会員から知的な刺激をいただき、研究活動と学会運営のイロハを学ばせていただきました。

研究活動のはじめの一步は、学部の卒業論文の内容をまとめ直した口頭発表でした。いまレジュメを見ると、冷や汗がでます。しかし、フロアから建設的な多くのコメントを頂戴しました。それらを踏まえて、内容と形式への推敲を重ねに重ね、行動計量学に投稿することができました。レフェリーからは、きめの細かい“教育的な”審査結果をいただきました。それをにらみながら改稿し、投稿論文は格段に良くなりました。口頭発表からレフェリーとのやりとりまでの過程を通じて、審査付き学術論文とはどのようなものを学びました。その論文が掲載された学会誌を受け取った日の夜は、それと一緒に寝ました。それほど嬉しかったです。こうして、口頭発表を6回おこない、行動計量学に3本とBehaviormetrikaに3本の論文をそれぞれ掲載していただいたときに、学会賞の制度が新設されました。第1回学会賞（優秀賞）の受賞は、専任のポストを得ていなかった当時のわたしにとって、大きな励みとなりました。

学会運営のはじめの一步は、欧文誌の編集委員でした。論文を執筆し学会誌に投稿しているだけの会員のときは、投稿論文に対する審査結果の返ってくるのが遅いとか、レフェリーからのコメントが意味不明だとか、いま思えば大変に身勝手な不満ばかりを抱いていたように思います。しかし、編集委員になって、学会誌に論文が掲載されるまでには、じつに多くの研究者がさまざまな形でかかわっていることを初めて知りました。投稿論文の中には、たとえば多くの誤字脱字を含むもの、図表番号がでたらめに近いもの、本文中に引用している文献が文献リストに含まれていないもの、そして従来研究とのかかわりの中で投稿論文が明確に位置づけられていないものが決して少なくないのです。このような論文に対しても、レフェリーや編集委員は多くの時間をかけて丁寧にコメントをしているのです。そのあと、和文誌の編集委員も務めさせていただきましたが、欧文誌のときと同じでした。こうして、いずれの編集委員会でも、わたしがご教授いただいたように若い研究者たちの役に立ちたい、という想いで活動いたしました。

最近、所属学部に関連する学会の立ち上げや運営へのかかわりと、わたし自身の研究関心の広がりなどが原因で、行動計量学会での諸活動が少なくなってしまっています。それゆえ、回顧的な内容にさせていただきました。行動計量学の発展を担うことはもちろんのこと、若い研究者がイキイキ活動できる学会であり続けて欲しいです。

[1986年（第1回）優秀賞受賞]

本学会の春の合宿セミナーは大学の若手研究者の方々に評判のよいセミナーです。もともと複数のゼミがゼミ合宿をジョイントで開催したのが始まりなので、交流の機会も含めて極めて教育的に運営されています。近年では産業界からの参加者が3分の1くらいを占めて、ますます賑わいをみせていますし、学会の会員を増やす機会ともなっています。

私は多摩大学で開かれた第11回春の合宿セミナーで全体講義を担当させていただきました(2008年3月29日)。「調査をめぐる今日的課題」という演題で、近年の産業界の動向と、その結果生じたマーケティング・リサーチの新しい課題を展望しました。提供した論点のひとつに仮説検証の限界があります。

マーケティングは、課題解決志向であり産業活動と強く結びついた実学的な分野です。実務の世界では仮説検証といってもアカデミックの世界とは異なり、仮説の否定を想定しないという one-sided な認識の人がいます。調査結果を自分に都合よく解釈することもあれば、それが無理なら調査そのものを否定してしまう、という事態さえ起きます。なぜそういう事態が起きるかを理解するには、マーケティングの目標を理解する必要があります。たとえば企業が「当社の新プロジェクトは成功する」という仮説のもとに事業を計画し資金を投入してきたあげく、導入直前に市場性が否定される調査結果が出たとしましょう。仮説は支持されませんでした、と否定するだけでは意味がありません。プロジェクトをどう修正すれば成功できるのか? という処方を見出さなければ課題解決に結びつかないからです。マーケティングに求められているのは患者への死亡宣告ではなく治療法なのです。

今日の成熟市場においては誰もが考えつく自明な市場はすでに開拓されています。未開拓であり、市場性があり、事業側のリソースの範囲内で実現可能であるという3拍子そろった新製品、新規事業を発見することは容易ではありません。マーケティングの課題は「難題」そのものです。

そういうわけで常に難しい課題に悩み、何か实际的に役立つ方法はないかと先輩諸科学から学んでいる、というのが現在のマーケティングの立ち位置ではないかというのが正直な感想です。マーケティングは顧客の価値創造などという、とうてい単一の学問だけではカバーできそうもない問題を扱っているのです。

日本行動計量学会の大会では1980年代から徐々にマーケティングの研究が発表されるようになりました。マーケティングと銘打ったセッションが始まったのが1998年からで、その後はほぼ毎年マーケティングのセッションが開かれるようになりました。2004年以降はマーケティング関係で複数セッションが組まれようになり、すでに定番化しています。

学会の草創期から、毎年の大会には企業のマーケティング部門の方とか、製品企画や広告担当の方々が大勢参加されてきました。企業に所属されている学会員の方が、今日の産業界がかかえる新しい課題をアカデミアンに教示してくださることも貴重な貢献です。その意味で、産業界は学会にとって重要なステークホルダーであると考えたべきではないでしょうか。産学が協働できるリアルな機会を提供することが大会のひとつの意義であろうと思います。

[理事]

## 行動計量学に学ぶ

岸野 洋久

東京大学大学院農学生命科学研究科

私が行動計量学会に入会させていただいたのは、90年代半ばでした。統計数理研究所で10年、海洋研究所で3年を過ごした後に、教養学部のある駒場に移って間もないころでした。私の中で行動計量学会は、当時の駒場の生活と重なり合って思い出されます。

海洋研究所では、魚類、底生生物、微生物にいたる海洋生物を調査し、海流と海底地質、大気と海洋の相互作用を調査し、海洋を構成する化学物質を調査します。当時、外洋を調査する白鳳丸と日本周辺海域を調査する淡青丸の2隻の船を擁しておりました。所内外からの調査の申請をまとめ、地質の研究者と生物の研究者が組むなど、乗合所帯による調査航海を組みます。互いに助け合ってそれぞれの分野のデータをサンプリングします。

駒場では、法学・政治学、経済学、社会学の先生方が活躍されておりました。多くの先生方は、授業時間を除いて自宅で研究するため、建物は普段静まり返っています。ですが、メールボックスに配布された先生方の出版ほやほやの書籍を見るたびに、心臓がきゅっと締められました。式も数字もまったくないのですが、膨大な先行研究を踏まえ、切れ味のよい視角と緻密な調査に裏打ちされた文章に、2 - 3のポイントを抑えた表を付すことにより、見事に説得力を獲得します。

海洋研究所では、海の新知見を提供して初めて研究の価値が認められます。駒場の国際社会科学専攻では、社会と制度に切り込む研究が評価されます。固有の分野で核心に迫る情報を自分で提供しない限り、存在意義を問われるという、それまでは経験しなかった不思議な気持ちに、しばしばなりました。行動計量学会への入会は、こうした時期だったのです。特定の手法にとらわれずに、さまざまな専門分野の独自性を尊重しつつ、計量的方法を通じて人間の行動と社会を理解する、という行動計量学会の理念に共感しました。

当時、紙のリサイクルが深刻な社会問題となっていました。古紙の供給過多から、価格が暴落したのです。各家庭で環境のために良かれと願って行ったりリサイクル行動が、はかrazも回収業者の生活を脅かす結果になったのです。そこで、紙リサイクル社会を構成する国内外の主要なアクターを尋ね、国内外のトイレットペーパーのブラインドテストを組み込んだ消費者意識調査を行いました。困難の背後にある原因として、消費者行動の矛盾と社会システムが浮かび上がってきました。

駒場から弥生のキャンパスに移り、いまではウイルスの適応、植物の除草剤耐性、昆虫の殺虫剤抵抗性など適応のメカニズムを、分子進化の視点で捉えることを研究の柱にしています。産業社会になって、私たちは周りの生態系に大きな淘汰圧をかけています。ですが、見えないところで生態系は適応し、時として私たちの脅威となって襲いかかっています。こうした問題を克服することに貢献するような研究ができればと願っています。主軸を人間の行動から人を困む生態系に移しましたが、私の中では行動計量学の持つ理念がいまでも眩しく光っています。

[1996年度 (第11回) 優秀賞受賞]

日本行動計量学会35周年おめでとうございます。学会運営にご尽力されてこられた先生方に心から敬意を表します。

私自身は、いつ、日本行動計量学会に入会したのか定かな記憶がありませんでした。調べてみると、どうも、平成3年だったようです。そうすると、学会の歴史の中で半分くらいの期間は会員として過ごしてきたことになります。正直、実感が湧きません。何らかの委員として学会運営に携わった経験がないこともあって、自分の中では今でも「新参者」という意識が強いのです。

私にとっては、平成3年に入会、という事実は重要です。それは、私自身が初職を得た直後のタイミングだったことを意味するからです。日本行動計量学会の中心を担う先生方のうちの幾人かには、学生の頃からなじみがありました。最初に教科書や参考書でお名前を知り、新書などでお顔を知り、授業で実際にお目にかかって、その事実に感動する、といったが第1段階です。そこから面識を経て、徐々に親しみを感じ、お人柄をよく知るようになって個人的にファンになる、というプロセスを経ていたように思います。研究の中身ももちろんですが、決して教科書には書かれていない、諸先生方の豊かな個性に魅了されていたことを懐かしく思い出します。それなのに、学生の間には入会手続きを取っていなかったという事実は、自分では少々意外でした。一人ひとりの先生方は大好きで、何かと理由をつけてまわりついたりしていたのですが、学会のメンバーとしてお仲間に入れていただくことには、どことなく気後れを感じていたのかもしれない。

思いがけず、平成2年12月に大学入試センターに職を与えられ、そこから、大学入試の研究をすることになりました。そこで初めて何らかの覚悟をしたのでしょうか。それが、入会の動機だったのではないかと自らの心中を推測する次第です。あれから17年以上が経過して、構成メンバーも少しずつ変わっていったにもかかわらず、日本行動計量学会とは適度の距離感で心地よいお付き合いをしていただいています。

大学入試の分野に携わってみると、研究のスタンスや捉え方にもよるのでしょうか、決して構造化されない、現場での泥臭い問題との格闘の連続のように感じます。問題の個性が強いので、どうということが行動計量学の分野への貢献になるのか、ここしばらくは考える余裕もなかったように思います。せめて、複雑な条件の絡み合う中での現実的な問題解決に向けて日本行動計量学会で発表される諸研究をどのように生かしていけるのか、そういったことが自分の課題になってくるのでしょうか。次々と新たな課題に追われる日々の暮らしの中で、少しは落ち着いて考える時間を作らなければならない、と自省する次第です。

最後になりましたが、日本行動計量学会の益々の発展を祈念いたしております。

[2007年(第22回)優秀賞受賞]

## 私の研究と行動計量学との関わり——森林から人間へ

鄭 躍 軍

人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

私は、もともと林学を学んで、種類、樹齡、大きさ（樹高と胸径）などの異なる木々が同じ空間で競り合いながら共生することにより、育まれる森林の成長過程及び収穫量の推計を研究していました。たとえ同じ時刻に発生した同じ樹種の苗木にしても、生まれ付きの競争力や与えられた環境状況、周辺の樹木本数の多少などの違いにより、それぞれの木はその成長過程が異なり、非常に複雑になることが大きな問題です。私はかつて木々の大きさや空間上での相対的な位置関係を基に、単位面積当たりの木々の成長軌跡をマルコフ過程で推測することに熱中しました。これは、樹種も大きさも同じである木々が次の時点にどのくらい大きくなるかということは、確率現象としてしかとらえないからです。言わば、これは森林社会という。

一方で、人間社会は多様な民族、言語、文化などをもつ人々から構成されますが、複雑な構造をもつという点では、森林社会も人間社会も同じです。しかしながら、人々のものの見方、考え方、そして行動意向などの人間行動を科学的に測ることは、木々を測ることより、はるかに困難です。統計数理研究所に就職したことをきっかけに、私が社会統計学的研究に関心を持ち始め、研究の重心を社会調査データの設計、収集と分析に関する研究へ転換しました。特に、抽出名簿の閲覧が制限されている今日の状況に備えて、多様な調査環境に適応した標本抽出法と質的データ解析の研究に焦点を絞ると同時に、人々の価値観や環境意識などの具体的な社会調査を行動計量学の観点から企画・実施しています。

社会調査法に関する理論的研究では、調査環境の変動と多様化に適応した個人標本の抽出手法を実証的に開発し、偏りの少ない標本抽出法を考案しています。特に、住民基本台帳や選挙人名簿などの抽出の枠の代わりに、国勢調査データ及び住宅地図を基に、個人を抽出するためのエリア・サンプリングを構築し、関連する調査票の設計、標本誤差、非標本誤差などの諸問題を検証しています。

データ解析法に関する研究では、日本人の国民性調査、価値観国際比較調査、環境意識調査などのデータを用いて、社会現象間の関連性、因果関係、意識構造の有様を解明するためのデータ解析法を模索しています。特に、調査データによる国民性、価値観、環境意識と人々の社会、文化、経済的背景などの人口統計学的要因との関連性の解明に力を注いでいます。

国際比較研究では、異なる社会に置かれる人々の価値観や環境意識などの構造的特徴を探索しています。とりわけ、東アジア諸国の価値観に主眼を置き、儒教文化圏の歴史的変容を分析し、異文化の理解と国際協調の一助となる情報を集積しています。一連の研究を通して、欧米、日韓中における国民性に関する異同の有様を明らかにし、環境意識、価値観などのような具体的な概念を実践的に確立すると同時に、「データを中心に現象を解明する」というデータサイエンスの視点から、国・地域間の意識の形成メカニズムを探究しています。

[2006年度（第21回）優秀賞受賞]

## 本物の調査者との出会い

松田 映二  
朝日新聞社世論調査センター

『行動計量学』第29巻第1号(2002)に、「『電話調査の精度』その1」と題した特集が掲載されている。その中で「朝日新聞社のRDD調査について」と題して論じさせていただいたことが、私と日本行動計量学会との最初のかかわりである。当時の理事長であった杉山明子先生から執筆依頼があったのだが、仕事に追われてなかなか時間がとれず、夏の蒸し暑い締め切り当日の夜に先生のご自宅まで原稿を持参した。杉山先生は、この特集について『行動計量学』第30巻第1号(2003)の「『電話調査の精度』その2」の冒頭で、急速なコミュニケーション手段の変化に伴う電話に対する人々の意識変化もあり、改めて電話調査の研究が必要だという旨の企画意図を述べている。

1998年参院選、2000年総選挙では、選挙人名簿から抽出した後に電話帳で番号を調べて電話する方法で調査をしていた。そのため、電話番号非掲載者に調査できず、都市部の無党派層の投票意向を大きく読み誤った。その反省から、非掲載者をも取り込み有権者のカバレッジを高めるRDD法を導入したわけである。その後の選挙予測の精度は、面接調査時代よりよくなっている。先のRDDの論文は、初代理事長である林知己夫先生が2002年8月に亡くなる直前に投稿したものである。ちょうどそのころ、林知己夫先生に日本医科大学の救急病棟でお会いし、2001年参院選の予測をRDD調査でピンポイント的中させたことや、次の総選挙をRDD調査でどう予測するかという話をした。いま解散は無いだろうからしばらくは夏休みとして、秋から本格的に準備を始めようということになった。帰りに先生は一本人差し指を立てて、ニコリと笑われた。次の総選挙でも1番をとるぞ(他社を凌ぐ一番いい予測結果を出すぞ)ということだった。林知己夫先生は、とにかく選挙が好きだった。調査が好きだった。RDD調査開発の際には調査会場まで来られて運用の様子を見学・体験された。持論である「実証的な確率論」と、自ら調査にかかわる姿勢を教えられた。

調査にかかわる多くの先生と、じつに多くの深い縁のあることを痛感している。『行動計量学』第35巻第1号(2008)に「郵送調査の効用と可能性」と題して郵送調査は高回収、高品質な結果を得る可能性のある手法だということや、そのための運用上の注意を論じさせていただいた。この取り組みにあたって、『郵送調査法』の著者である林英夫先生に多くの助言をいただいた。林英夫先生も、杉山先生が企画した『行動計量学』第23巻第1号(1996)の特集「社会調査の精度」で「郵送調査法」と題した論文を載せている。この論文のおわりで林英夫先生は、「郵送調査法はマイナーな代替的方法ではなく、独自性を有するひとつの調査法である。また、返信率向上のための工夫の余地が多分に残された期待のもてる調査法であり、古くて新しい調査法であるともいえる」と述べている。他者からのいわれなき中傷をものともせず、郵送調査の可能性を実証し続けてきた林英夫先生の研究者としての姿勢に感銘を受けた。この学会には本物の調査者がいる。

[2007年度(第9回)奨励賞受賞]

## 電話調査と行動計量学

城川美佳

東邦大学医学部社会医学講座

私が、日本行動計量学会に参加させて頂くことになったきっかけは、電話調査である。1987 - 8年だったと思う。当時、米国 CDC (Centers for Disease Control and Prevention : 疾病予防管理センター) が人の疾病と生活習慣や健康関連行動に関する調査を電話で行っていた。BRFSS (The Behavioral Risk Factor Surveillance System) という、1984年から現在まで継続して行われているこの調査で用いられている調査手法は Random Digit Dialing (RDD) 法であった。その頃は、RDD 法は日本であまり知られておらず、実際に RDD 法を利用した社会調査も行われていなかったように思う。そこで、所属講座の教授が私の研究テーマとして RDD 法を提示してくれたのだった。

RDD 法どころか、社会調査法自体をほとんど知らなかった私の右往左往ぶりを見かねて、日本行動計量学会の社会調査研究会に行ってみないかと誘っていただいた。杉山明子先生が主催されていた社会調査研究会では、社会調査に関する様々な情報や課題が検討され、また海外の調査に関する情報の提供があった。私が所属する医学・保健領域では何の問題意識も感じずにしている調査や分析手法のそれぞれに裏打ちされた経験と知見があること、実は医学・保健領域のデータ自体に特殊性があり利用されている分析手法があること等、私にとっては知らない事だらけで、「井の中の蛙大海を知らず」(というか、私の専門研究領域である公衆衛生学自体「大海」のようなものなので、「大海の中の蛙宇宙を知らず」と言った方が良いかも知れないが)のような体験だった。しかし一方で非常に刺激的な時間、研究者にとっては幸せな時間だったと思う。

この社会調査研究会に入れて頂いたことがきっかけで、日本行動計量学会に入会させて頂き、RDD 法に関する研究発表の場をいただき、諸先輩の貴重なご意見をいただく事ができた。忘れられないのは、RDD 法の調査手法について発表させて頂いた日本行動計量学会第27回大会の時、学会会場の倉敷市民会館の食堂で林知己夫先生と杉山明子先生からご指導いただいたことである。そのとき食べた昼食のメニューや味は全く覚えていないが、大先生お二方を占有してお話しさせていただいたことは、今でもよく覚えている。医学領域では普通に行われている結果の調整に関する事で、この両先生からのご意見が2005年から行っている社会調査研究会のきっかけになった。

社会調査研究会では、社会調査の質について検討している。現在、調査が花盛りである。調査環境の悪化が言われている中で、どうしたらよりパワーのある調査結果が得られるか、そのために必要な事は何か、過去の知見を基に現在の状況に見合った調査設計や実査手段、分析方法を検討する必要があると考える。

2006年には肥田野直・水野欽司賞(奨励賞)を頂戴し、身の引き締まる思いであった。最初に「君、やってみなさいよ」と言われて始めた社会調査に関する研究は、未だ私にとって未知の領域が大きい大海である。これまでにご指導頂いた諸先生への感謝を胸に、この大海での航海を続けたいと思う。

[2006年度(第8回)奨励賞受賞]

## 行動計量学会との関わりと今後

広田 すみれ  
武蔵工業大学環境情報学部

思い返すと、行動計量学会との関わりは割合偶発的に深まっていった。最初に知ったのは約20年前院生の頃、指導教授の岩男壽美子先生が発表された際である。確か価値観の構造の国際比較研究のご発表だった。だが、当時私は専門のリスク研究を社会心理学会や心理学会に発表するだけで精一杯、行動計量学会は遥か遠い存在だった。その後、どういう訳か統計学を教えるのが主になってしまったので入会はした。が、依然行動計量学会は私にとっては本の背表紙でお名前をしばしば拝見する「雲の上の先生方」がいらっしゃるところで、私のようなちんぴらには到底恐くて参加・発表のできる場ではなかった……正直なところ。

ところが最近環境が変わり、岩男先生にお目にかかる機会が増えた。で、「受刑者のデータの分析結果、行動計量で発表してね」とのお言葉により、光栄にも先ごろ初めて先生と共同で発表させていただいた。これが行動計量学会での大変遅い発表デビュー。その上、早大院で同級生だった前田忠彦君に「広報委員やってよ」と言われてお手伝いもすることになり、それが契機でようやくコンスタントに参加することとなった。

そこに至り、遅まきながらようやくわかった。行動計量学会は私にとって非常に興味深いところだった、ということが。行動計量学会は学際性が高く、実社会の方も多い。その中には、自分の専門や本や論文だけではわからなかった新しい動きや分析のヒントがあちこちにある。Webの発展と共に利用可能なデータの形が変わっていく中、手法の変化を予想してはいたが、先日の学会では分析が大きく変わっていく強く新しい流れをひしひしと実感した。振り返って自分の専門の学会では、確立された手法の利用が主でそれ以上多くは望めない。その上、近頃は「質的」研究が大流行で、どうも分が悪い。しかし、一方で社会現象についてはマルチエージェントシミュレーションや複雑ネットワークといった手法で物理学者や経済学者が多くの成果を挙げつつある。このように人間行動や社会現象を数量的な新しい手法で切り込めることは発展のひとつのポイントであり、そういった知識がなければ今後他分野に到底対抗できない。その手がかりが得られるのは、関係学会のうちたぶん行動計量学会以外には無い。また、測定や標本抽出などの問題について、真正面から取り組んだ知見が得られるのもありがたい。……叱られようが恥をかこうが、結局面白いものは面白いのだ！

私は数的手法の凡庸なユーザーに過ぎないし、残念ながら菲才なため研究上は行動計量学会で大した貢献は到底できそうにない。が、学会の意義については十二分に感じることから、その運営のお手伝いに加えていただいていることを光栄に感じている。

…しかし、それにしてももうちょっと早くから積極的に参加しておけばよかった、しまった、惜しいことをした、せめてこれから、というのが現在の私の感想である。

[広報委員]

## 日本行動計量学会の良き動きとともに

若山大樹  
駒澤大学経営学部

本学会設立35周年記念誌刊行というこの機会に、本学会と関わらせていただく中で気付かせていただいた本学会の良き伝統について、少し述べさせていただきます。存じます。

### 第1回春の合宿セミナー参加が入会のきっかけ

本学会入会のきっかけは、大学院生のころ指導教官から紹介いただいた第1回春の合宿セミナーへの参加であり、講義担当の先生から入会申込書をいただいたことにあります。セミナーの内容は統計関連科目をしっかりと勉強してこなかった初学者に配慮したものであったと存じます。残念ながら講義の内容は記憶に残っておりませんが、参加学生の方々に車で近くの海へ遊びに連れて行っていただいたことはよく覚えております。本学会への入会は春の合宿セミナーへの参加に由るところが大きいわけですが、セミナー主催者の方々が非会員初学者にも門戸を広げていただいたことと、潜在的な需要のある人々がセミナー開催を知り参加しやすいようにご努力いただいたこと、潜在的な入会希望者が入会関連書類を入手しやすいようにご配慮いただいたことのお蔭であると感謝しております。

### はじめての学会発表

大学院2年目に指導教官と連名で初めて学会発表をさせていただきましたが、本学会が私にとって初めての学会発表でした。また本学会会員が多く参加する国際会議 IMPS2001でも報告の機会をいただきました。当時不十分な発表内容にもかかわらずご参加の会員の方々からは温かいコメントや建設的な質問をいただいたことが印象に残っており、大学院生として最初に発表させていただいた学会が本学会でよかったと感謝しております。本学会のように、院生の発表にも耳を傾けていただけのことや暖かいコメント、建設的な質問をいただくことができる学会は、若手を潰してしまわずに若手を育てることにつながると存じますが、そのような学会はそれほど多くないのかもしれない。

### はじめての学会委員会活動

広報委員会インターネット小委員会委員のお役目をいただいたのは、研究職へ就職してちょうど3年目のことであり、今年で3年目になりました。学会発表のところでも書かせていただきましたが、本学会には若手にも委員会活動のチャンスを与えてくださる点が本学会の良き特徴であると思います。まだまだ委員のひとりとしてお役に立てるところまでには至っておりませんが、日々数多くの会員の方々のご好意で成り立っている学会活動を拝見し、色々と勉強させていただき貴重な機会を頂いております。

### まとめ

最後にまとめさせていただきますと、本学会の春の合宿セミナーは毎年開催されて11年目になりますが、本学会のこの企画（動き）は会員以外にも広く教育の機会を与えるという意味で社会に貢献するものであり、また、本学会は学会発表や学会委員会活動において若手にチャンスを与え、若手を育てる学会としての良き伝統があります。本学会設立と同じ1973年生まれの私がこういったことを申し上げるのは大変恐れ多いことですが、本学会の持つ特色ある良き伝統がこれからも受け継がれ根付いていくことが、本学会発展のために大切なことなのではないかと思います。

[広報委員]

これまで、多次元尺度構成法 (MDS) とクラスター分析法における多元データの分析方法について研究を行ってきました。これらの研究をとおして、人々の行動の背後に潜んでいる現象をいかに計量化して、あるべき本来の関係を視覚的に表現するかという課題に取り組んできました。MDS は布置を求めることでデータの構造を空間的に表現し、クラスター分析法はクラスターを求めることでデータの構造を離散的に表現します。多くの場合、両者は同じ近接度データに対して適用可能であり、同じデータのそれぞれ異なった側面を明らかにする相補的な手法であるといえます。そのため、両者はできる限り併用することが望ましく、併用して解釈を行うことは、データの構造を解釈がする上で有益であると考えられています。近年の情報技術の発展にともなって、MDS もクラスター分析法も、多くのデータが入手可能となり、多くの分野への応用が一層期待されています。そして、対象間のあるべき本来の関係を表現するために、非対称データや多元データなど様々なデータ形式に対応したモデルについての研究が行われています。

通常の MDS やクラスター分析法では、多元データが分析される場合、データから 2 つの対象間の関係に基づく距離を算出することで分析は実行されます。本来は 3 つ以上の対象間の関係も 2 つの対象間の関係に置き換えることなく、直接的に表現することによって、はじめて対象間の本来のあるべき関係が表現可能になります。

しかし、実際は、コンビニエンス・ストアでの購買行動のように状況により購買点数が限定される状況も考えられ、全ての対象間の関係を考慮して人々が行動を行っていると考えるのは不自然です。全ての対象間の関係が考慮して分析を行う必要はないとも考えられます。したがって、現実のデータには、2 つの対象間の関係で説明できる場合、3 つ以上の対象間の関係でないと説明できない場合の双方が存在しているといえます。そのため、多元データを分析する際には、データ内の情報を整理して、重要な情報を抽出して、その傾向ごとに計量化を実行することが重要となります。そこで、現在、考慮すべき対象間の関係の上限を設け、その条件に基づいて多元データを分析することのできるモデルの研究、開発を現在行っています、さらには、多元データの非対称性を分析することのできるモデルについての研究は少ないことから、今後は、非対称な多元データを分析することのできるモデルへの拡張を目指しています。

最近の市販のソフトウェアにおいても MDS やクラスター分析法を実行することが出来るようになってはいますが、分析できるデータや利用できる手法は限られたもので、その使用方法についてもあまり触れられていないなど多くの制約が存在しています。今後はより幅広いユーザーの方々に利用してもらえよう、これらの問題の解決に努めながら、データの計量化の必要性や重要性を伝えていけるように励んでいきたいと考えています。

[2006年度 (第 8 回) 奨励賞受賞]

## 日本行動計量学会に参加して

竹内光悦  
実践女子大学人間社会学部

私が日本行動計量学会に参加し始めてちょうど今年で10年になります。まだまだ若輩者であり、記念誌への記事など不釣り合いと思いましたが、現在の私の状況や今後の抱負をお知らせすることにより、これまで以上に叱咤激励を頂けると思い、投稿いたしました。

本学会での私の最初の発表のとき、まだ博士後期課程に在籍中で、多変量解析の中でもクラスター分析に興味があり、クラスター分析手法を用いた際の分類結果の評価について研究をしていました。当時、理学系の大学院に所属していた私は、理論的な“きれいな”データを分析することが多かったのですが、本学会での発表を通じて、現実社会での“きれいな”データを見聞きすることができ、このことは私の経験の中でも重要であったと感じています。特にその後体験した様々な社会調査で、調査データの分析を行った際にデータの多様性を知り、より様々なデータのタイプを考慮した解析手法や結果を評価する指標が必要であると考えていました。このことは現在取り組んでいる非対称データを分類対象とした非対称クラスター分析の私の研究にも影響を与えていると思います。

また近年では、教育やマーケティングなど応用分野にも興味を持ち、理論と実践の両側面での研究を考えています。特にここ1、2年の初等・中等教育機関における統計教育の変化は目覚ましく、ご存じの方も多いと思いますが、新しい学習指導要領においても統計が重要視され、ますます統計教育の発展が期待されます。この結果には本学会にも関係する諸先生方の貢献も大きいと思います。国外をみてもデータを用いた客観的根拠に基づく論証は重要視され、問題点を把握し、データ収集の計画をして、データを適切に集め、データを適切に処理し、それらの結果に基づく考察を行うこと、そしてさらなる問題点がないか問題把握に戻るという一連のデータ分析のサイクルについて、初等教育から指導し、特に単年度で終わるのではなく、各学年で少しずつレベルを上げ、スキルのスパイラルアップを目指しています。単なるデータをさわるだけではなく、このような目的意識を持ってデータにふれる問題解決力の育成は日本においても近い将来期待・実現されていくと思われれます。このとき、理論と応用の両視点での研究が多い本学会の貢献も大きいと思われれます。

本学会においても私は良き師、良き研究の先輩方、また良き研究仲間恵まれ、今日まで研究を続けられました。まだまだ力不足は否めませんが、微力ながら本学会の発展に寄与できればと思います。

[2002年度(第4回)奨励賞受賞]

## 日本行動計量学会35周年に寄せて

藤 井 聡

東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

日本行動計量学会は、筆者が土木計画、交通計画で研究をはじめ、はじめて土木以外の分野の方々と接触を持つ機会をもてた最初の学会である。最初に日本行動計量学会に参加したのは、学位論文をまとめる前のことであった。筆者の学位論文は、アクティビティ分析、交通行動分析と呼ばれる研究分野で、交通計画を立てる折の基礎情報となる、「交通需要」を予測するために、一人一人の都市生活者の時空間内での行動軌跡を統計的に予測する技術を開発することを目的としたものであった。すなわち、筆者の当時の仕事は、文字通り、「行動計量」のモデルを開発することだったのである。

その中で、様々な分野の研究者にお目にかかることができた。統計学の先生方や、数理心理学の先生方、そして、意思決定に関わる心理学を研究しておられる先生方であった。言うまでもなく、分野が異なれば、研究の「目的」は大いに異なっている。上述の様に、当時の筆者は、「行動を予測する」ということを目的とした諸研究を行っていた一方で、心理学や統計学、数理心理学は、必ずしも「予測」を目的とするものではない。しかし、目的は異なっても、研究の対象は「人間の行動」であり、そのためのアプローチとして「行動を測定したデータ」を分析するのであり、そして、その分析の方法として「統計学」を用いているという点では、大いに重なりあっていたのである。そうした点から、行動計量学会の場に参加することは、筆者にとって大いに刺激となったのである。

とはいえ、やはり、目的が異なれば、「共同研究」を進めるというようなことは難しい。それ故、当時は、行動計量学会は「勉強」の場ではあっても、「議論」や「共同研究」の場ではなかった。筆者にとって、行動計量学会が議論や共同研究の場となったのは、やはり、研究目的を一にする共同研究者とご一緒する機会に恵まれたからである。学位を取る以前は「行動の予測」にのみ関心を抱いた研究を進めていた筆者であったが、学位取得後「行動の理解」に重点を置いた研究を進めようとしていた、そうした中で、行動計量学会に共に属していた竹村和久先生（当時筑波大学、現在早稲田大学教授）と研究をご一緒する機会に恵まれ、それ以降、行動計量学会が共同研究の場、となったのである。それ以来、「状況依存的焦点モデル」に関する研究をはじめとした、認知的で、統計的で、かつ、行動的な意思決定の共同研究をご一緒させていただき一方、社会的な要素や価値論的な要素も加味した多様な分野の研究者とご一緒する機会に恵まれるに至っている。こうした経緯を振り返るに、行動計量学会の場が、筆者の現在の研究生活の展開において極めて重要な位置を占めていたものと改めて感じ入る次第である。

[2005年度（第20回）優秀賞受賞]